

徳川吉宗の文教デザイン：『六諭衍義大意』研究 ノート

川平，敏文
九州大学大学院人文科学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/2202925>

出版情報：語文研究. 124, pp.14-33, 2017-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



徳川吉宗の文教デザイン

——『六諭衍義大意』研究ノート——

川 平 敏 文

はじめに

江戸時代の書籍にはさまざまなロングセラーがある。四書五経のような儒学の経典、『古文真宝』『唐詩選』のような漢詩文集、『伊勢物語』『徒然草』のような日本古典、そのほか『塵劫記』『実語教』のような教科書類などは、江戸時代の理知と情念の基層をなすものとして繰り返し出版され、読まれて続けた。これらの書籍はその成立後、自然とその価値が定まっていたいき、結果としてロングセラーとなるに至ったものであるが、ここに取り上げる室鳩巢著『六諭衍義大意』（以下、『大意』と略称する）は、間違いなく江戸時代のロングセラーでありながら、その成立・流通が当初、幕府によって仕組まれ

たものであった点が、他の書籍とはいささか様相を異にしている。^(注1)その仕掛人（プロデューサー）が、時の將軍・徳川吉宗であった。

『大意』はどのような経緯をたどって刊行されたのか。それをつぶさに知ることのできる資料が、青地兼山編『兼山秘策』に収載される鳩巢の書簡類である。本資料の内容は、日本における『六諭衍義』の受容を網羅的に研究した東恩納寛惇によって、すでに一通りは紹介されている（注1掲載書）。しかし、そこではあくまでもその大要が整理されているのみで、その文辞の奥に潜む細かいニュアンスまでが注意されたものではない。また『大意』刊行の背後にある、東アジア・レベルの文教政策の動向や、『大意』の編刊経緯から見えてくる吉宗の文教政策の特質などについても、あわせて留意すべき点

が存するものと思われる。

そこで本稿では、いま一度『兼山秘策』の本文に就きながら、『大意』がどのような思惑のもとに企画されたのか、そこからどんな歴史的な事実が見えてくるのかについて、二三の鄙見を述べてみることにする。

一 「六諭」から「聖諭十六条」まで

— 明清の文教政策への関心

『大意』が庶民教化の教材として広く流布したことは先述の通りである。吉宗が示した庶民教化の方針は、学術の振興を促しただけではなく、その風潮は俗文芸の世界にも波及して、談義本と呼ばれる教訓的な読み物の叢生をもたらし^(注3)た。ならば、吉宗のこういった教化政策はどこから発想されたのか。それを、彼の政治制度への興味、あるいは経済の困窮、それに伴う風俗の頹廃といった、吉宗個人の学問的嗜好や国内の情勢からのみ説明するのは、視野が狭小であろう。むしろそれらは直接的な要因であったかもしれないが、この問題は東アジアにおける教化政策の動向という、もう一段広い視野からの位置づけが必要であると思われる^(注3)。

そもそも、吉宗はなぜ『六諭衍義』という書物に目を付け

たのか。いま、東恩納の整理するところ（注1掲載書、一八一三頁）をもつて、事実関係だけを単純に追っていくならば、次のようになる。まず、琉球の儒学者・程順則が、薩摩藩主・島津吉貴に本書を献上した（正徳四年）。それをさらに、島津吉貴が徳川吉宗に献上したところ（享保四年三月）、吉宗は本書を庶民教化に有益であると考え、荻生徂徠に命じてその付訓本（同六年十一月奥附）を、また室鳩巢に命じてその和訳本（同七年四月奥附）を公刊させた——と。このように見れば、ことの発端は何やら偶発的な出来事であり、事態は程順則↓島津吉貴↓徳川吉宗へと、一方向的に流れているように思われる。しかし、実際はそのような偶発的で、一方向的なものではなかった。その背景には、中国（および琉球）の文教政策についての関心という、吉宗側からのベクトルも存在したのである。

上述した島津吉貴による吉宗への『六諭衍義』献上は、じつは吉宗による、吉貴への中国事情聞き取り調査のなかで行われたものであった。このとき聞き取られた内容は、「中華之儀に付申上候覚」と題する資料として残されており、そこには清朝の制度や風俗についての様々な情報が、箇条書きにして記されている^(注4)。そしてその冒頭に、くだんの『六諭衍義』の話題が置かれているのである。

一、中華之仕置六ヶ条御座候。去子年、唐え相渡候琉球人板行仕、持帰候六論衍義と申書一冊御座候付、差上申候。右之内にて諸事仕置式之儀相見え申候。

これは、中国の「仕置」(政治)の大綱ともいふべきものが、『六論衍義』のなかに集約されているといった意味であろう。さらに同資料には、教育体制および官吏登用制度にかんする次のような条目も見えている。

一、村里毎に学問所有之、人々出精相勤申候。学問所切により官人に罷成候に付、何者にても別して精出し申候由に御座候。

吉宗の明律研究はよく知られているが、彼はさらに進んで清朝の法律・地誌などの研究も進めていた。^(注5)『六論衍義』への注目は、そのような明清の制度・風俗研究という文脈のなかの、ひとつのトピックなのであった。いや、より正確に言うならば、『六論衍義』への注目は、後述するような、東アジア・レベルの民衆教化動向にかんする吉宗の関心から、たぐりよせられたトピックだったので。すなわち、日本に「国際規格」としての民衆倫理を将来し、それをもって教化しようというビジョンが、吉宗には備わっていたと思しい。享保期から始まる学術の振興や談義本の叢生は、そのような国際的なスケールで位置づけることが可能なのである。

それでは、その「国際規格」であるところの民衆倫理とは何か。それが「六論」であった。「六論」がどのような中身を持ち、どのような方法で普及せしめられていたのか。先行研究に拠りながら、そのあらましを述べてみたい。^(注6)

「六論」とは、「孝順父母(両親への孝行)、尊敬長上(年長者への敬意)、和睦郷里(近隣との親睦)、教訓子孫(子孫への教諭)、各安生理(家職の励行)、母為非為(犯罪の禁止)」という、六つの訓戒のことである。この訓戒は、宋代にはその原型ができあがっていたと見られるが、それがオーソライズ(公認)されるのは、洪武三十一年(一三九八)に發布された明の太祖(洪武帝)による「教民榜文」第一九条においてである。洪武帝は郷村における道德教育として、半ば強制的にこの「六論」の奉読を義務付けた。明代の郷村は「里甲」と呼ばれる行政単位に区分されていたが、各里甲から「木鐸老人」と呼ばれる代表者を選出し、その者に毎月六回、この「六論」を叫喚させたのである。^(注7)

その後、里甲制度は衰頽し、木鐸老人の制度も形骸化したのであったが、嘉靖八年(一五二九)の世宗(嘉靖帝)による題准を機に、「六論」の奉読が再び行われるようになった。このときは、「郷約」と呼ばれる郷村の自治組織が運営する行事のなかに、「六論」の奉読やその講釈が組み込まれた。そし

て、このような明末における庶民教化運動の盛り上がりのおかげで生まれたのが『六諭衍義』であった。本書は会稽の人・范鉉の編になるもので、「六諭」の内容を当時の白話（通俗文）によって分かりやすく解説したものである。

さて、明代におけるこのような庶民教化政策は、続く清代においても発展的に継承される。清の順治帝は順治九年（一六五二）、「六諭」を頒行したが、続く康熙帝は康熙九年（一六七〇）、これをさらに増補した「聖諭十六条」なる条文を布告し、各省の官僚および郷約において奉読させるとともに、その講説も行わせたのである。これを「聖諭宣講」と呼ぶが、それは明代の「六諭」の講説を基本的に受け継ぎながらも、その励行は官僚の昇進や俸禄にかかわる要件とされるなど、より厳格なものとなった。またその講説の方法も、識字できない民衆のために、歌唱による「聖諭」の朗誦が取り入れるなど、より実践的なものとなった。

これが、吉宗が『六諭衍義』を公刊するにいたるまでの、中国における民衆教化の状況である。

さらに興味深いのは、この「六諭」を主体とする教化制度の影響は、中国のみにとどまらず、台湾や琉球にまで及んでいるということである。台湾は一六八三年に清に領有されるが、一六九六年には聖堂・学校が建設され、儒教による徳化

政策が敷かれる。そこでは「聖諭十六条」による郷民教化が行われた。^(注8)

同じく琉球は一六六三年に清による冊封を受け、やはり一六七二年頃に久米村に聖堂が建設されている。^(注9)このころ、清に留学していた琉球の儒者・程順則は、師である竺天植の書齋で『六諭衍義』を見出し、これを祖国琉球の民衆教化、あるいはその中国語学習のテキストにしようと思いつく。そこで彼は私財を投じて、留学先の福州においてこれを出版、のち琉球へ持ち帰って、その普及に尽力した。こうした経緯で、順則が総地頭・親方を勤めた名護間切番所では、彼の死後も毎年元旦に、「六諭」を礼拝する行事が続けられたという（注3掲載・深谷論文）。また、このとき出版された『六諭衍義』の一部が、島津吉貴へ献上され、さらに徳川吉宗の許にまで達したわけである。

このようにしてみれば、「六諭」は清を代表とする東アジアにおける民衆倫理の「国際規格」であったという言い方も、あながち過言ではなからう。海禁政策をとっていたとはいえ、日本も東アジアの政治的・文化的秩序から無縁でいられることはない。その内容の有効性をふくめて、「六諭」の研究は、東アジアの文教政策の動向を知るうえで重要な課題であったのだ。

では、吉宗はそのことに本当に関心を持っていたのかというところが、次に問題となろう。「六論」およびその奉読の制度などが記されている明清の文献が、どれほど吉宗のもとに到達していたかを見ることで、それは証明されるであろう。

吉宗が明の制度を研究していたことは前述のとおりであるが、それらを集成した『大明会典』には、「六論」の布告を示した記事が載っている。幕府の書物方が編纂した『幕府書物方日記』享保五年二月二十二日の条には、吉宗の側近で御側御用取次の有馬氏倫が、『大明会典』二四〇冊を出納した記事が見える。⁽¹⁵⁾本書は同年四月十七日に返却されたが、これ以後も同年八月五日、十月八日、翌享保六年三月十二日などに記事が見えるように、吉宗側近による借用と返却を何度も繰り返している。むしろ、借主は吉宗であったと推測される。こうした背景のもと、後述のように享保六年閏七月十三日、吉宗は鳩巢に対し『大意』編述についての最初の下問を行ったのである。ちなみに、『大意』の編述が行われている期間も、吉宗はさらに、清の制度を集成した『大清会典』に興味を示し、享保七年四月十日頃から借用を開始している。

また、吉宗が「六論」の制について認識していた可能性を示す記事としては、次のようなものがある。享保七年九月二十二日であるから、『大意』刊行の半年後であるが、鳩巢が書

物方の奈佐勝英に即刻登城するように命じられて参上すると、有馬氏倫が『皇明詔制』なる書を持ち出して、この書物と「御蔵に有之『皇明詔令』『皇明制書』『皇明書』」とが、同一のものかどうかを確認してほしいと要請したという。ここに出る三書のうち、『皇明制書』という書物には、「六論」の制式が定められた、前述の「教民榜文」が収載されている。したがって、本書は少なくとも享保七年九月以前に幕府の書庫に所蔵されていたことは確実で、吉宗によって参看されていた可能性がある。

さらに吉宗は、これとほぼ同時期に、幕儒である荻生北溪（徂徠の弟、後述）に、明清の制度・風俗の異同を考証させた『明朝清朝ノ異同』なる報告書を提出させている。^(注1)本書「礼部」には、「六論」についての記事が次のようにある。

一、六論 敬「重天地」、孝「順父母」、和「睦鄉里」、莫「作「非為」、謹「防盜賊」、小「心火燭」ノ六条也。康熙九年、十六条ノ上論ト云コトアリ、文官・武官ニ命ジテ軍民共ニ是ヲ常々読覺ル様ニセシナリ。是ハ明朝大誥ノ意持ナリ。十六条ハ、……（下略）

ここでは明の「六論」と、清の「聖諭十六条」の概要が述べられ、特に後者の布告の方法としては、文官・武官に暗誦させたということが報告されている。大庭脩の考証によれば、

本書は享保七年八月から十二月頃に成書したとするから（注11掲載書）、やはりこれも『大意』刊行後の事例に属するが、その布告のあり方が述べられている点で重要である。後述のように、吉宗はこうした明清の事例を知っていながら、これと同様の形では布告しなかつたのである。

以上、『大意』刊行後の「傍証」もあるが、かれこれ突き合わせてみれば、吉宗が明清の制度、特に本稿の問題に絞っていえば、「六諭」をベースとした教化制度を研究し、それを実行したものであったことは明らかであろう。

次に、『大意』がその刊行に至るまでにどのような経緯をたどったのか、そしてそこには吉宗のどのような意向が反映されているのかについて考えてみたい。

二 『兼山秘策』を読む

江戸の室鳩巢が、門人の青地兼山・礼幹兄弟、そのほかの加賀藩関係者に宛てた極秘の書簡を整理したものが『兼山秘策』である。ここには『大意』の編述・刊行経緯がかなりつぶさに述べられているので、以下本書からそれに関係する記事を、時系列に沿って抜粋しながら考察を加えていくこととする。引用は瀧本誠一編『日本経済大典』第六巻（史誌出版

社、一九二八年）による。なお、引用文中の（ ）内は川平による補注である。

『六諭衍義』和訳の下命

（一）享保六年閏七月十九日・室新助（鳩巢）↓大地新八郎、

五三〇頁

一、当月十三日木下平三郎（菊潭）同時登城候処、不_二存寄_一御前へ被_二召出_一、結構の上意冥加至極難_レ有奉_レ存候。先頃以来御尋の儀共有_レ之申上候処、六諭衍義と申書物、御前より御出し被_レ成、かなにて和らげ可_レ被_レ遊候、如何奉_レ存候哉、宿へ持参仕候て熟覽可_レ仕旨被_二仰出_一候。其故十三日兩人（鳩巢・菊潭）右の書物持参、所存の通申上候。……退出以後兵庫殿（有馬氏倫）を以書物御出し被_レ成、兩人の内新助（鳩巢）に被_二仰付_一候間、此書かなにて和らげ可_レ申旨被_二仰出_一候。只今高倉屋敷講釈も御断申上引籠り、右の御用に取懸り罷在候。……此度の書も来月中には出来可_レ申かと存候。何とぞ（吉宗の）御意に応じ候様にと願申候。余程風教のためにも成可_レ申かと存候。是も楠諸士教御意に応じ申故と奉_レ存候。

◆考察

木下菊潭と鳩巢がいつものように登城していたところ、不意に吉宗から召し出されて、『六論衍義』の和訳について下問があった。この時点では菊潭、鳩巢のいずれがその任に当たるかは決まっていなかったが、のちに吉宗側近の有馬氏倫が、両人のうち鳩巢に御指名があったと伝えた。そこで鳩巢は、通常業務として行っていた高倉屋敷の講釈も中断して、その作業に没頭しているという。「風教のため」になるとして、この事業に前向きに取り組んでいる様子である。また、菊潭ではなく自分に声がかかったことを嬉しく思うと同時に、これは『楠諸士教』のおかげだとも言っている。

『楠諸士教』とは、鳩巢著『明君家訓』（正徳五年刊）の改題本で、楠正成が家来に下知した訓戒という体裁で、武士のあるべき姿を仮名で分かりやすく論じたもの。^(注)鳩巢の述べるところによると、『明君家訓』は発刊後十年ほどの間、さして話題にも上らなかったが、あるとき近習衆が本書を持てはやしたところ、にわかにはその噂が江戸中へ飛び火して、やがては吉宗の叡覧にも入った。そうして「御城へ罷出候程の者」は皆本書を買い求めるほどに流行したため、『楠諸士教』と名を改めて再版することになったという（享保六年六月四日付・鳩巢書簡、五二三頁）。鳩巢は、こうした仮名教訓書の「実

績」を持っていたことが、自分が選ばれた理由であろうと言うのである。

前田綱紀の反応と林家

〈2〉享保六年八月二十四日・室新助（鳩巢）↓大地新八郎、

五三一頁

一、御用の物上中下三冊に書立、紙数六七十丁程有^レ之候。先日首尾よく指上候。書の仕立並詞つゞきよろしく、御近習衆にも御きかせ被^レ成候処、何れも感通いたし候。是は御前に御とめ置被^レ成候。但余りくはしく長く候て、末々の者へ御見せ被^レ成候はゞいかゞに候間、短くいたし直し可^レ上の旨重て被^レ仰出、只今又取懸り罷在候。先一段致し上候様にと被^レ仰出候て、一兩日前一段さし上申候。いまだ何の被^レ仰出も無^レ之候。弥咄通に可^レ仕旨被^レ仰出候はゞ、不^レ残仕立可^レ申候。此間林家父子三人へ謡の抄被^レ仰出候。出来上り候処不^レ応^二御意^一、致し直し可^レ申被^レ仰出候。御返し被^レ成候由に候。拙者此度さし上候へば、御前には御とめ被^レ成候由被^レ仰出候へば、御意に応じ申と奉^レ存候。随分首尾能候間、御氣遣有間敷候。以上

◆考察

鳩巢は『六論衍義』の和訳を、上中下三冊、紙数にして六七〇枚にまとめ、吉宗に献上した。吉宗の反応は上々で、近習衆にも読み聞かせたところ、皆な心に響いているようであったとの報告を受けた。ただし吉宗は、これを「末々の者」まで読ませるためには、なお簡約化が必要であるという。そこで取り急ぎ「六論」のうち一段のみ修正して再提出したのだと。鳩巢はついでに、林家にも『謡抄』作成の下命があったが、こちらはまったくの不出来で、吉宗の意にかなわず、突き返されたと報告している。ここには林家へのあからさまなライバル意識が窺えて面白い。

ところで、鳩巢の言だけを見ると、林家はいかにも無能のように思われるのであるが、鳩巢のかつての主君であった加賀藩主・前田綱紀は、書籍や学問、海外の情勢などに関する書通を、林家と長きにわたって交わしている。それが『松雲公林家往復書簡』(一一巻一一冊写、金沢市立玉川図書館蔵)^(注13)である。ここには元禄十五年二月から享保九年九月までの、綱紀と林家(主に鳳岡)との書状によるやり取りが収録されている。このように長年にわたり、かつ頻繁にやり取りを交わしているところを見れば、鳩巢の評価とはやや温度差があつて、綱紀は林家の学識もそれなりに信頼していたもの

と思われる。

さて、その巻七所収の享保六年八月八日付書簡によれば、綱紀は林鳳岡に次のような質問を出している。

一、先日被仰聞候六論演義旨、康熙帝之上諭ヲ琉球ノ程順則、演義を作申候哉。此順則日本えも参申候由承候。其時者何と称申候哉、承度候。右御用御透之時分、示書被仰付可被下候。以上

「先日被仰聞」とあることから見れば、『六論衍義』の話題はすでに鳳岡から綱紀に伝えられていたようで、本書簡はその日本伝来の経緯を確かめる文面である。これに対して、翌日、鳳岡が答えたのが以下の文面である。

一、六論衍義之儀被仰下候。是は当御代琉球人來朝之節、琉球にて政務之儀御尋被遊候。其節罷歸委細可申上由、申上候。去年か当年か、其段は不存候得共、六論衍義差上、此通之外政事無之由、申上候。琉球之程順則作り申候由、被仰下候。順則は琉球人にて、日本へも参候由、其後は不存候。康熙帝より六論に申付候限及承候得共、此儀も不慥候。拙者後御前にて一覽仕候迄にて御座候故、委くは不存候。室新助(鳩巢)へ御尋被遊候は、相知可申哉と奉存候。以上

鳳岡は『六論衍義』の伝来について、以前、琉球使節が日本

へ来たときに、琉球における政事についての下問があった。それで去年か今年か、琉球の者が『六諭衍義』を持参し、政事についてはこれ以外のことは何もないと答えたという。『六諭衍義』を人民統治の基本理念としているという意味であろう。鳳岡は、「御前にて本書を一覧しただけですので、よくは存じません。鳩巢にお尋ねください」と答えている。本書の内容やその伝来については、林家でも正確には把握できていなかったようである。しかしここで、琉球使節に吉宗が下問したというのは、興味深い情報である。吉宗側からのベクトルが裏付けられるからである。琉球使節の江戸入府は享保三年十一月で、薩摩藩主・島津吉貴が引率役をしていた。この時に『六諭衍義』の名前が話題に上り、翌年三月に吉貴が吉宗に実物を献上した、という経緯をたどった可能性がある。それにしても、これは鳩巢に和訳の命が下ってからわずかに一ヶ月後のやり取りである。ここから分かるのは、少なくとも吉宗の文教方面の様々な施策（書籍の収集や調査研究など）については、綱紀は林家を通していち早くその情報を得ていたということである。むろん、鳩巢という「裏ルート」も存在していたわけであるから、加賀藩の情報収集力は非常に高かったというべきであろう。

鳩巢と吉宗の文教イメージ

〈3〉享保六年九月四日・賜書（鳩巢→兼山）、五三四頁

一、六諭衍義最前被_二仰出_一候以後、かなに和らげ上中下三冊に仕立指上候処に、四五日過候て被_二仰出_一候は、書の仕立宜敷被_二思召_一候。御直にも御覽被_レ成、且又御側の衆へも御読せ被_レ成、各へ御聞かせ候処、何も感通仕由申候。然ば和らげ様も宜敷と被_二思召_一候。然共思召には是より短く被_レ成度被_二思召_一、此度上候は一段の紙数七十程も有_レ之候。一段を三枚位につめ可_レ申。左候は、文意達しがたく可_レ有_レ之候間、只今の様に感情うつり申間敷被_二思召_一候。とかく人に承候て感じ不_レ申候ては、又詮なき事に被_二思召_一候。とかく本書の意を取候て短く致し、且又感情のぬけ不_レ申様に仕見可_レ申候。先一段仕候て差上候様にと重て被_二仰出_一候故、其後父母に孝行の一段短く仕直し、先さし上候処に、二三日前兵庫頭殿（有馬氏倫）よりよびに参候て登城候処、一段宜敷候間此通に不_レ残仕立候様にと被_二仰出_一、只今宅にて取懸り罷在候。けつく最前くはしく致し候よりは六ヶ敷御座候。

先は私、兵庫頭殿へ申候は、余り短候て紙数無_レ之候ては却て見申者軽く可_レ存候。最前上候通に候へば、上中下にて一部の手と可_レ申、其上文段長く候へば其品ども多候故、面白

くも存候て見可^レ申。然ば箇様に被^二仰出^一候上に申上候事いかゞに奉^レ存候へども、愚見は右の通に奉^レ存候旨申候へば、幾度も左様の料簡は申上候てよく候間、可^二申上^一旨にて被^二申上^一候へば、重ねて被^二仰出^一候は、成程長く候へば文段の移もよく、道理もくはしく候へども、末々御見せ被^レ成度との事に候。然ば三冊共有^レ之候ては、軽者などは求めがたくも可^レ有^レ之候。一冊にて求候も心易候へば、遍く末々に取はやし申筈に被^二思召^一候。何程短くても此度上より被^二仰付^一御広も被^レ成と有^レ之候は、輕は存まじく候間、とかく短く被^レ成度と被^二思召^一候由被^二仰出^一候。御意加り候て箇様に手短く被^レ成候儀に候へば、御威光にてはやり可^レ申候。其段は乍恐御尤に奉^レ存候由申候て罷歸申候。

幸最前清書仕候時分、書損の一段有^レ之候間、此度進申候。六論は孝^二順父母^一、尊^二敬長上^一、和^二睦鄉里^一、教^二訓子孫^一、各安^二生理^一、母^レ作^二非為^一、此通にて候。此度進候書損じは孝順父母の一段にて候。残りも此格に和らげ申物に御座候。左様御心得御覽可^レ被^レ成候。箇様に致し候へば、上中下にて二段宛を一冊に致し、合て紙数六七十張も有^レ之候。此度改めて調申候。一冊に致し紙数も三十枚迄も有^レ之間敷と存候。

◆考察

鳩巢は手紙の受信者である兼山にむかつて、〈2〉に掲出し

た和訳の簡約化について、やや詳しく報告している。鳩巢は、あまりに短いと書物としての威厳が薄くなり、感情が移らないと訴えたが、吉宗は、三冊もあると小身の者は求めにくい、一冊ならば求めやすく、末々の者までも手に取ることができらるだろうとの思し召しだという。鳩巢はやや不満を抱いているようであるが、短くなつたとはいえ吉宗の「御意」が加わっているのだから、「御威光」によつて流行るだろう、との見方を受け入れている。こうして和訳本は、当初の半分ほどの分量（三〇枚程度）の一冊本になつた。

吉宗が一冊につづめよと命じたのは、後述のように、往來物のような書物をイメージしていたからであらう。鳩巢は、本書によつて自学自習できるようなテキストをイメージしていたが、吉宗はむしろ解説の丁寧さよりも、その簡潔さを重視したのである。そのあたりの両者の考え方の違いは、この後さらに顕現化する。

〈4〉享保六年九月十八日・賜札幹書（鳩巢↓札幹）、五三五頁

一、私御用の事六論衍義、書体先日かなにて和らげ申候。初篇草稿有^レ之に付、長公迄進申候。御覽可^レ被^レ成存候。其後事短につめ候て調可^レ申被^二仰出^一、半分程に短く仕直しさし上候へば、奥の律の処御前にて御自身御考被^レ遊、御前より

調候て出申候。律は其通に可^レ仕由に御座候。口の勸諭の処も今少和らかに仕見可^レ申由、其外少づ、御好共有^レ之候。只今に至り未相済不^レ申候。愚見と合不^レ申候処共有^レ之候へども、とかく御好みの事に候へば、先其通仕候。何とぞ此後御学文被^レ遊候様に致し度奉^レ存候。其所^レ教を臣とする事を好て、其所^レ受^レ教を臣とする事を不^レ好の弊、古より明主にも有^レ之事と見へ申候。左様にては大有為の望は無^レ之と奉^レ存候。以上

◆考察

「初篇」とは上巻のことか。そしてその「草稿」を「長公」へ差し上げたという。「長公」とはこの場合、青地礼幹の兄兼山を指しているのであろう。『六論衍義』には、各条の末尾にその条の内容を表した律詩が配置されているが、この律詩の部分は、吉宗の考えでそのままに残すようにしたという。また「口の勸諭の処」（本文であろう）も、吉宗の提案で今少し分かりやすい文言にしたというが、これは前述の簡約化のことを指しているのであろう。これらのことは鳩巢の好みとは合わないものであったが、吉宗の好みである以上、それに従うしかなかった。鳩巢は、吉宗が今後、学問に励むよう仕向けていかなければならないと言っているが、これは、吉宗の学問好きが真のものでないという認識があるからである。た

とえば享保六年正月十八日付・鳩巢書簡には、吉宗が推進する高倉屋敷での講釈について、「御自身に御聞被^レ遊度との御事にては無^レ之様に相見え申候」（五〇一頁）と述べている。

また（４）の末尾で、鳩巢は自分の意見が受け入れられないことを嘆いて次のように言っている。吉宗の態度は、『孟子』公孫丑下にいう、自分が教える者を臣とするのを好み、自分が教えてもらう者を臣とするのを嫌うの類であり、それでは立派な事業の成就是望めない、と。しかし、『大意』が後代にもたらした様々な影響を考えると、鳩巢のこの批判は結果的に、必ずしも当を得たものではなかったと言えるだろう。

徂徠による訓点本の作成

（５）享保六年十月二十四日・室新助（鳩巢）↓青地蔵人（兼山）、五四二頁

……六論衍義をば荻生惣右衛門（徂徠）に点被^二仰付^一候。惣右衛門は惣七郎（北溪）兄にて御座候。……此度六論衍義の点被^二仰付^一候事も、彼が門下にては規模に申と見へ申し候。先頃六論衍義本書も板に被^レ成度物に御座候。御聞被^レ成候へば、中に俗語どもまじり合点難^レ仕由に候。唐の俗語よく存知申者をば承及不^レ申哉と有馬殿被^レ申候。私申候は、俗語は

字義にて不_レ參者にて候。前後の文段にて料簡仕候へば大方通じ申儀も有_レ之候へども、夫は推量と申物に候間、俗語をよく存知申人に被_二仰付_一可_レ然と奉_レ存候。岡島援之（冠山）と申者、長崎に久しく罷在候。唐人と出合俗語も熟し申由承申旨候。援之は是も甲斐守殿（柳沢吉里）扶持人にて、荻生惣右衛門より才子に御座候。其故惣右衛門も援之に唐音など承申候由に御座候。さやうの儀にて六論衍義の点、惣右衛門に被_二仰付_一たる物と奉_レ存候。

深見新右衛門（玄岱）父子などへ被_二仰付_一可_レ然物に候へども、新右衛門父子には外に大清会典と申大部の書の和らぎを被_二仰付_一候。大明会典と申書有_レ之候。夫を清朝に至候て少宛増減致したる物と見へ申候。新渡の書にて外には無_レ之候。

◆考察

ここで新たに報告されているのは、吉宗が『六論衍義』の訓点を、荻生徂徠に仰せつけたという事実である。徂徠は、鳩巢と同じく高倉屋敷の講釈も務めていた幕儒・荻生北溪の兄で、柳沢家に召し抱えられていた儒者であった。徂徠にこのような命が下ったのは、彼が白話に長じていると判断されたからである。

前述のように、『六論衍義』は庶民でも理解しやすいよう白話体で書かれていた。その訓点本刊行の話が持ち上がったと

き、鳩巢は有馬氏倫から誰が適任かとの相談を受けたので、長崎での実地経験も豊富な岡島冠山を推薦しておいた。鳩巢が言うには、冠山は徂徠の白話の師であり、徂徠よりも「才子」であった。あるいは、同じく白話に長けた深見玄岱・有隣父子などへ仰せつけられるのがよからうけれども、彼らはいま清の法律集成である『大清会典』という大部の本の翻訳に携わっている（ので無理だろう）とも報告している。ともあれ実際は、冠山や玄岱らではなく徂徠が下命を受けた。そして徂徠の門下生はこれを「規模」（誉れ）と思っているという。

本稿では中略したが、本条には鳩巢が聞き及んだ徂徠・北溪兄弟の略伝、および鳩巢の徂徠評が書かれてあつて面白い。徂徠は、柳沢吉保に愛顧されて五百石という破格の待遇を受けている、また吉保の没後も「甲斐守殿（柳沢吉里）へ其儘仕へ候て罷在候。金銀書籍共に富有の者にて候。当地にて第一の博学と最良の人には申候。其身も殊の外自負致し罷在体にて候。只今五十余の者に御座候」などと言っている。徂徠の古文辞学に対する鳩巢の評は『駿台雑話』巻一、五などに詳しく展開されているが、『兼山秘策』所収の享保八年二月十八日・青地礼幹書簡の中でも、「先生」（鳩巢）が徂徠を「異学の徒」と称して、その活躍を憂慮している旨が伝えられている（六五三頁）。それだけに、『六論衍義』関連の出版物に

おいて自分と同列の待遇をうけたことに、不快の色を隠せないようである。

〔6〕享保七年正月七日・室新助（鳩巢）↓青地蔵人（兼山）、
五四七頁

一、六論衍義に旧臘唐本を获生惣右衛門に和点被_レ仰付_一印行被_レ仰付_一、臘月二十四日時分出来仕候筈に候由、書物屋申聞せ候。其後出来の儀未承不_レ申候。……惣右衛門事、只今江戸にて博学文章等をもて鳴り申候。門弟も数多有_レ之候。六論衍義の訳文は印行不_レ被_レ仰付_一筈にも罷成候哉。何の沙汰も不_レ承候。但先本書を印行被_レ仰付_一、其上にかな書をも可_レ被_レ仰付_一被_レ思召_一候哉、難_レ量奉_レ存候。

〔7〕享保七年正月二十三日・（鳩巢）↓青地礼幹、五五〇頁
……六論衍義の儀、前書申進候通に御座候。私より和語に調指上申候。已後何の御沙汰も無_レ之候。本書は旧臘板出来、百部余り摺候てさし上申由、書物屋申候。外へは未流布不_レ仕候。

◆考察

徂徠に仰せつけられた訓点本は、享保六年十二月二十四日には完成する由を本屋から聞いていたが、年が明けてもその

沙汰を聞かない。徂徠は江戸で「博学文章」をもって人気で門弟も多い、と鳩巢は兼山に伝えているが、前述のとおり、「博学文章」はもちろん素直な褒め言葉ではない。

それはそうと、自分が仰せつけられた和訳本は、あれ以後何も音沙汰がない。もしや版行も中止になったものか、それともまずは「本書」（訓点本）を先に版行させ、その上で和訳本を版行するということなのか、判断がつきかねると言っている。このあたりのスケジュールは、本人にも十分知らされていなかったのだろう。

また、その数週間後に礼幹に宛てた書簡〔7〕によれば、徂徠の訓点本は予定通り前年の十二月には初刷本が出来上がっており、百部程度が献上されたものという。ただし外部へは流布していないというから、こちらは始めから広く普及させるといふことは考えていなかったことが想像される。

『大意』の体裁

〔8〕享保七年二月二十八日・室新助（鳩巢）↓奥村源左衛門（脩運）、五五二頁

……六論衍義かな書の物も大方相済、此間序跋被_レ仰付_一候。近日相済可_レ申と存候。追付刊行可_レ仕筈にて候間、当年中には

其御地などへも可^レ參と存候。段々御好共有^レ之候処、無^レ滯大方濟、大慶不^レ過^レ之存候。委細は権七郎（中根）物語可^レ申候。

（9）享保七年三月九日・室新助（鳩巢） ↓青地藏人（兼山）、
五五三頁

（吉宗から直に下問あり、）然処に此間被^二仰付^一候六論衍義の
かな書、弥出来仕候哉と御尋候故、段段出来仕候旨申上候。

（10）享保七年四月九日・室新助（鳩巢） ↓奥村源左衛門（脩
運）、五六一頁

（別の日、吉宗の御前で講釈のあと、）また六論衍義かな書は
やく出来候様に被^レ遊度旨上意にて候故、二三日中に差上可^レ
申旨申上、其儘退出仕候。……六論衍義かな書、去年出来差
上候処、当春御出し被^レ成、書中少し宛御好みの処有^レ之、其
をひたと改指上申候。其上序跋も被^二仰付^一、旁板下未^二相濟
一候故、右の通御尋に御座候。よき手にか、せ可^レ申旨被^二仰
出^一候故、筆耕には如何に存候て、当地にて尊円流の能書と
世に申候石川勘助と申浪人の事申上候へば、勘助手を御覧の
上に此者に可^二申付^一旨に為^二申談^一候。二三日過候て勘助方
より相濟てさし上、跋は唐の文章に調可^レ申旨に付、跋ばか

りは私手跡にて調さし上候。其後相濟候て前月末に書坊へ町
奉行中より被^二相渡^一、早速京へ遣し板にほり申候。近き内に
は板出来參可^レ申候間、其後諸国へも流布可^レ仕候。

随分簡約に被^レ成度由にて、漸かな書四十枚程可^レ有^レ之候。
六論衍義大意と名付申候。これも御好みに御座候。末に詩每
篇に有^レ之候。詩をば其儘不^レ殘日本往来物の様に大きく調さ
せ可^レ申旨被^二仰出^一候。是は民家などにて小児の手習仕候物
に、幸手本にも仕候様にとの思召にて御座候。今川・庭訓の
様成類にて、其よりは風教に助け有^レ之物に御座候。本書（六
論衍義）を少宛取候て、一々直し申にては無^レ之、又一通り
かな書の書体、別の物に御座候。頓て其御地などへも參可^レ
申候間、御覧可^レ被^レ成候。

◆考察

徂徠による訓点本の出版などを挟んで、半年ほども放置状
態であつた和訳本であるが、三月上旬頃、再び吉宗から完成
を促された。そして能書に版下を書かせたいが、誰かよかろ
うとの下問があつたので、鳩巢は尊円流の書家で、江戸で浪
人をしている石川勘助なる人物を推薦した。そこでその筆跡
を上覧に供したところ、この者でよかろうということになつ
た。また跋文は漢文がよいということなので、自分の筆跡で
書き上げ、提出した。三月末には町奉行を経て本屋に清書原

稿が渡され、京都で彫刻にかかるという。江戸ではなく、京都の彫師に依頼したのは、京都の版刻のほうが美麗であるとの認識があつたのだらう。別の箇所で、京都の書肆・柳枝軒小川多左衛門の造本のことを、「印板殊の外念を入候て、此度の諸士教なども随分雅に仕申候」などと褒めている（享保六年十月十九日・鳩巢書簡、五三八頁）。

さらに「六論衍義大意」という書名も、吉宗の「御好み」であつたことが分かる。また、原本の各条末に付された律詩を往来物のように大きく書かせたのも吉宗の発案で、手習いの手本として利用されることを期待していたらしい。『今川状』や『庭訓往来』のようなものであるが、それらよりは風教の助けとなるだらう、と鳩巢は言っている。

『大意』の講釈と下賜

（11）享保七年五月二十四日・（鳩巢）↓奥村修運、五七三頁
三月十七日侍講以後、前月二十九日又御前へ被_レ召出_一、良久御直に御尋の儀共有_レ之、其上にて私此度撰進仕候六論衍義の跋を講じ候様との儀にて、御前にて講じ申候。委細は筆紙に難_二申尽_一、……

（12）享保七年六月晦日・青地藤太夫（礼幹）↓蔵人（兼山）、五九四頁

一、比日六論衍義大意板下相調候浪人石川勘助儀、町奉行所へ被_二召出_一「白銀二枚被_レ下、殊の外難_レ有がり、先生御宅へも御礼に罷出候。此者申候は、町中にて手習子供取申押立候者御改被_レ成候得ば、八百人余御座候。其内重も立申者十人計、勘助も其内にて名主召連罷出候処、手習師匠仕候者共無益の手本相調可_レ申よりは、此書の内を可_レ然様に幾切も調候て子供へ教可_レ申候。夫故御上より被_レ下候旨にて、右の者共へ一冊づ、被_レ下候。一段を手本六ツ宛に相調専教申旨、勘助申候由、御物語御座候。

◆考察

享保七年四月二十九日、鳩巢は吉宗の前に召されて、『大意』の跋文について講釈をした。これは吉宗が、跋文の内容を改めて確認したものと思われる。また六月には、『大意』の版下を書いた石川勘助が、鳩巢宅にこの度の御礼を申し述べに来たという。石川が言うには、江戸に手習い師匠と言われる者は八百人ほどいる。そのうちの特に主だった者十人と、その町の名主たちが召し出され、めいめいに一冊ずつ『大意』が下賜されたという。

このことは、当時の町触によって、より詳細な事実が確認

できる。すなわち、享保七年六月八日、町年寄の奈良屋を通じて、町ごとの手習い師匠の人数と氏名の照会があり、それを受けて六月二十二日に、中山出雲守の仰せ渡しにより、奈良屋において、以下の者が「六論衍義」（『大意』であろう）の下賜を受けたという。

本石町壺町目	馬場春水	同式町目	石川勘助
伊勢町	荒木蓉水	瀬戸物町	成瀬弥市郎
通式町目	星合伊織	常盤町	豊島善次郎

（『江戸町触集成』第四卷、一二七頁）

これによれば、実際には六名であつたらしい。こうして『大意』は徐々にその存在を知られるようになり、特に近世後期以後の大流行を見せたことは、注1に掲げた諸論の詳述するところである。

さて、このように見てくると、『大意』の企画・体裁・流布、そのあらゆる段階にわたって、吉宗が細かく指導していることが分かる。『大意』はたしかに鳩巢の著述ではあるが、吉宗と鳩巢の合作、というより、むしろ吉宗の意向が隅々に行き渡った事業だったわけである。これまで、吉宗は単に『大意』の編述を下命したという程度の理解をされてきたように思われるが、上に見たごとく、彼の関与は微に入り細

に渡ったものであり、それも単なる「好み」のレベルを超えた、かなり戦略的なビジョンに基づいていたと言えるであろう。本稿の題名を「徳川吉宗の文教デザイン」とした所以である。

ところで、『大意』を刊行するにあたって、吉宗はなぜ明清の「聖諭」のような号令を出さずに、基本的には民間の自主性に任せた、緩やかな流布の形態を選んだのであろうか。それは、彼の学問観・教育観によるものと思われる。

鳩巢・菊潭らは、かつて吉宗から、どのようにすれば幕臣が学問するようになるかについて下問されたことがあった。彼らは、まず將軍が学問奨励の大号令をかけ、強制的に学ばせるべきであると上申したが、それに対して吉宗の意向として伝えられたのが、以下の内容である。

学問と申物は權威を以人にさせ候ては何の益も無^レ之候。面々に信じ候て自然に趣き不^レ申候ては仕形ばかりに罷成申候。既に常憲院様御代人々に無理に学文被^ニ仰付^一候て、殊外難儀致し至^ニ于今^一懲り申候様に罷成候。

（享保六年二月十三日付・鳩巢書簡、五〇四頁）

吉宗は常憲院（徳川綱吉）時代の学問奨励策を批判して、そのような「權威を以」てする強制的なものでは効果は出ない、学問というものはそれぞれが自覺をして自然に行わなくては

意味がない、と言ったというのだ。^(注1) 清朝の「聖諭」のような、官僚によって厳しく管理される教化システムを取り入れなかった要因は、このところに淵源しているのではなからうか。ちなみに鳩巢は、この吉宗の学問観・教育観に対して、次のような思いを抱いていた。

学文、権力にて無理に被^レ仰付^一候事、御同心に不^レ被^二思召^一候段は、乍^レ恐御尤至極の思召には候へども、只今の風俗にて中々自然に信じ候て趣申物は有間敷候。先一往御威勢にて被^二仰付^一、其内世上にはやり出候はゞ、自然と趣き申様にも可^二罷成^一、……とかく教と申物は、嚴勵に無^レ之候ては難^レ行奉^レ存候。(同、五〇五頁)

吉宗の言うことはもつともではあるが、現今の墮落した世風のなかで、「自然」に学問を身につけようとする者はいないであろう。まず「御威勢」によって号令をかければ、上からの強制ではありながらも、世の中に学問の風潮が生まれ、そこから「自然」と身につける者も出てくるはずだ。とかく教えというものは、「嚴勵」によらなくては難しいものである、と。鳩巢は他の箇所でも、「御教令」(享保七年四月九日付書簡、五六三頁)による学問奨励の必要性・有効性を進言しているが、このように見ると、鳩巢は『大意』の内容だけでなく、その布告・流布のあり方についても、清朝の「聖諭」のよう

な、もう少し強制力を持った形を理想としていたに違いない。しかし結果として、吉宗の「文教デザイン」がしかるべく有効に働いたことについては、先に触れた通りであった。歴史に「もしも」はないが、鳩巢の「文教デザイン」が果たしてこれほどの成果を挙げ得たかどうかは分からない。

おわりに

以上、『大意』述作から刊行までの経緯を、『兼山秘策』を中心に追いかけて、整理してみた。この作業から窺えたのは、まず、「六論」関連のテキストによる庶民教化という方法が、東アジア・レベルの文教政策の流れを意識したものであったこと、そして『大意』はその企画から普及にいたるまで、プロデューサーである吉宗の細かい関与があったこと、である。しかし吉宗は、それを完全に中国の「手本」通りには行わなかった。上からの「強制」という形にせず、「奨励」というやや緩やかな形に留めたところが、彼の文教デザインの特徴でもあったろう。それは朝廷に対する遠慮かもしれないし、日本人の気質に関する、何らかの見識に基くものかもしれないが、この点についてはなお考究を要する。

最後に、後代における『大意』の流布状況が窺える資料で、

先行研究ではいまだ指摘されていないものを偶見したので、本稿の末尾に附録として報告しておきたい。

庄司南畝の『家職要道』（慶応二年刊）に、むかし江戸神田に三河屋何某という者があって、毎日霊前で『大意』を奉読していたのは殊勝なことである、といった旨の話が載っている。東恩納寛惇はこの記事を紹介しつつ、この三河屋何某とは天保の頃の人であろうかと推測しているが（注1掲載書、六四頁）、この話の元ネタになったと思われるのが、『鎮火用心車』（明和三年刊）巻下に載る左の記事である。

先年、江戸駿河町三河屋某とかやいへる人、朝おき手水うがいで後、坐鋪になをり六論衍義大意とかやいへる書物一卷取出し、是を尊書となづけ、うや／＼しく押いたゞき慎で拝読する事、恰一向宗門の御ふみとやらんよむがごとし。万の災難をはらひ、祥をまねく所、家の祈禱これよりよきはなしとて、毎朝／＼怠る事なし。いかなる事にやと人々不審せしが、何様男子二人成長するに随ひ、いづれも孝行に手代実体にして精出し、家内むつまじく店年々繁昌す。扱こそ祈禱のしるしあらはれたれと、人々感じけり。万の災難をはらひ、祥をまねくの良術、しかも石垣より組立るの実理、祈禱の本方と云べし。家内安穩・富貴長久をいのらぬ人世に有まじ。逆もいの

らば斯る儲成いのりこそ、あらまほしかるべけれ。

駿河町の三河屋は毎朝潔斎して、『大意』をあたかも一向宗門徒における蓮如の『御文』のごとく押し頂き、謹んで読誦するのを常としていた。そしてそのおかげで、家業も繁盛したという。

ここで、ある者が「六論衍義大意とはいかやうなる書物なりや」と問うた。そこで作者は、本書がもと琉球からもたらされたこと、吉宗の勸諭によって平仮名に和らげられ公刊されたことなどの次第を述べる。すると、またある者が「尊書を拝読して家の祈禱となる理いかむ」と問う。作者の答えは以下のようである。

こたふ、拝読するのみを云にあらず。日読して怠り奉らざる事、彼三河屋とかやがごとくせば、必祈禱と成理あらむ。いかにとなれば、凡家に有物は親子・兄妹・夫婦・主従これなり。面々其分を安んじて、互に道をもつてむつまじきを、家の斉たるといふなり。斯斉たる中より万の祥は生じ、斉はざる所あるより、かならず災は生ずる物ゆへ、祥を求めんとならば、家を斉るをもつて先とし、本方とす。家を斉んの道は主人の行ひにあり。家の斉はざるは、主人の心に偏私有ば也。偏私とは人の服しがたきゆゑんにして、心の癖と云が如し。然るを尊書を日読

して怠り不奉ときは、六論の義理だん／＼通和するに随ひ、或は悦び、或は悔るほどに、覚えず彼癖なをる事、良薬を久しく用ひていつとなく病愈にひとし。心の癖なをるに随ひ、人感服して終に家齊ふべし。所謂其家を斉んと欲する者は、先其身を修む。其身を修めんと欲する者は、先其心を正うすとかや。且「心だに誠の道に叶ひなば不^{いのち}朽^くとも神や守らむ」とやらの神詠にも通ず。日説^{ひせつ}諸の災をはらひ、祥ひをまねくの理^{ことば}、分明に弁ふべし。家・身を禍するもの、火に限るべけんや。

要するに、「六論」を日々読誦することによって、主人は自らの心を顧みて悪い癖を取り除くことができる。するとその主人に感服して、家内全体も自然と治まつてくる。そのような安定した家内の状態が、災禍を払い吉祥を招くことにつながっていくというのである。

先述のように、この記事は明和三年に刊行された『鎮火用心車』に載るものである。とすれば、この三河屋何某の逸話は、東恩納の推測した天保頃よりずいぶんと遡ることになるう。

宝暦・明和あたりの談義本の隆盛を支えていたのも、かかる敬虔なる町人たちであったのだ。

諷^{うたふ}はとても、手習師匠の手際でいかぬ物。鞍にも太鼓に

もあはぬからは、人中^{ひとなか}で間にあはねば、息筋張りて教るもいらぬ事。其隙に大学の一巻もおしへ、六論衍義の大意など、毎日／＼読せよかし。

(宝暦二年刊『当世下手談義』巻三)

注 1 「六論衍義大意」の諸版およびその受容についての先行研究としては、東恩納寛淳『東恩納寛惇全集』第八巻（第一書房、一九八〇年）所収の一連の論考、三田村鳶魚『教化と江戸文学』（一九四二年初出、『三田村鳶魚全集』第二三巻所収）、高橋昌彦「江戸時代後期における『六論衍義大意』の多様化」（『福岡大学日本語日本文学』第二三号、二〇一四年）などがある。

注 2 注1掲載の三田村鳶魚著書、中野三敏『戯作研究』（中央公論社、一九八一年）。

注 3 同様の研究視点を示したものに、深谷克己「東アジア法文明と教諭支配——近世日本を中心に——」（『アジア地域文化学の発展』所収、早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター、二〇〇六年）、殷曉星「江戸中後期における『六論』関係書の受容」（『次世代人文社会研究』第九号、東西大学日本研究センター（韓国）、二〇一三年）があるが、吉宗の積極的関与という点については論及がない。

注 4 大庭脩編『享保時代の日中関係資料二』（関西大学東西学術研究所資料集刊九一二、一九八六年）所収。

注 5 眞壁仁「徳川儒学思想における明清交替——江戸儒学界における正統の転位とその変遷——」（『北大法学論集』六二一六、二

注6 ○一二年)によれば、吉宗ら幕府中枢の清朝制度研究への関心は、一般の儒学者のそれに先んずるものであったという。

酒井忠夫『増補 中国善書の研究』上下(国書刊行会、二〇〇〇年)、殷曉星「六論」関係書の一考察——その「宣講」と流传を中心に——(『東アジアの思想と文化』第四号、二〇一二年)など。

注7 明刊本『皇明制書』巻九(古典研究会叢書、一九九六年、汲古書院)より、当該条を書き下して示す。「一、每郷每里、各本鐸一箇を置き、本里の内、年老或いは残疾して事を理ふ能はざる人、或いは瞽目の者に、小児をして牽引せしめ、鐸を持ちて本里を循行す。本里の内に此等の人無きが如きは、別里の内に選び取り、俱に直言叫喚せしめ、衆をして勸其為善、毋犯刑憲のことを聞き知らしむ。其の詞に曰く、孝順父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、毋作非為。此くの如き者、毎月六次なり」。

注8 陳文媛「清朝統治下における台湾の道德教育——「聖諭」の考察を手がかりとして——」(『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 社会学心理学教育学』第三八号、一九九三年)、鈴木健一「郷村教育——明代里甲制と郷約の教区指摘意義——」(『近世アジア教育史研究』、文理書院、一九六六年)。

注9 原田禹雄訳注『王楫 冊封琉球使録三篇』(榕樹書林、一九九七年)二六七頁。

注10 東京大学史料編纂所編「大日本近世史料」所収翻刻による。

注11 大庭脩編『享保時代の日中関係資料 三』(関西大学東西学術研究所資料集刊九一四、一九九五年) 参照。

注12 『明君家訓』の関連諸本については、近藤斉『近世以降 武家家訓の研究』(風間書房、一九七五年)七九—一〇八頁が詳し

い。

注13 伊東多三郎・山本武夫「近世儒学研究の一史料——尊経閣文庫所蔵林家往復書簡について——」(『文化史学』第八号、一九五三)に概要の紹介がある。

注14 辻本雅史は、ここに荻生徂徠の学問観・教育観との類似、あるいはその影響を見ている。『近世教育思想史の研究』(思文閣出版、一九九〇年)第一章参照。

※本稿の引用文はすべて、原本・翻刻を問わず、表記を通行字体に改めたり、句読点を新たに付したりした。

※本稿は平成二十九年年度・科研費基盤(C)「室鳩巢の和文著述とその流布・影響についての研究」(課題番号:26370241)による成果の一部である。

(かわひら としふみ・本学准教授)